

# 人間存在と表象

松本長彦

## 一 「表象」概念の多義性について

「表象」という語は、様々に用いられ、その意味を一義的に決定することは難しい。ここではまず、「表象」の辞書的意味を再確認し、この語の基本的意味の範囲について考えてみたい。

『大漢和辞典』を調べてみると、「表象」という語は『史記』に出てくるということである。<sup>(1)</sup>『史記』の成立は紀元前九一年頃とされているから、既に紀元前一世紀にはこの語は使用されていたわけである。しかしその語義は、「表はれたしるし。又、表はれたすがた。」という、文字通りの意味であるから、今日我々が使用する「表象」という語の意味とは、少しずれがあると考えねばならない。ちなみに、『日本国語大辞典』によれば、<sup>(2)</sup>国木田独歩の一九〇〇年の作品に「現われた形、姿」という意味での「表象」の用例があるそうだから、一九世紀までは日本においても、中国伝来の伝統的な意味での用法があつたと考えることができるであろう。

現代日本語として使用されている「表象」という語は、やはり基本的にはヨーロッパ語の翻訳語として成立したと考えるべきである。『大漢和辞典』にも、それを指示する語釈がある。また『日本国語大辞典』の語義説明と初出を

見ると、「②（一する）考えなどを形に現わすこと。特に、ある抽象的なものごとを、別のより具体的なものごとによってあらわすこと。」とか、「③哲学で、意識の内に現われてくるものやその内容。」という説明が挙げられていて、その出典として『教育・心理・論理術語詳解』（一八八五）や『改訂増補哲学字彙』（一八八四）といった、当時の専門用語辞典が挙げられている。そして、『改訂増補哲学字彙』には「Manifestation 表象」という記述があることが示されている。「表象」の原語として representation とか Vorstellung を予想していた私には、『大漢和辞典』の presentation（紹介、披露、表示、発表、表象、等）や『改訂増補哲学字彙』の manifestation（表明、明示、等）という原語指示は少々意外ではあったが、ともかくも、現在我々が使用している「表象」という語が、「哲学」や「主観・客観」といった語と同様に、幕末から明治期の、欧米の学術文化輸入の過程で成立した翻訳語であることは、間違いのないところである。

では、現在我々が使用している「表象」という語の意味は、と改めて問い直すために、手許にあるいくつかの国語辞典を調べてみたが、各辞書の説明には、多少のばらつきがあることが分かる。<sup>③</sup>比較的大きな国語辞典である『広辞苑』では、「知覚に基づいて意識に現れる外的対象の像」という、かなり限定された語義を採用しているが、恐らくこれは心理学の分野での用法であって、哲学の専門家である私の日常的な用法に照らすと、不十分であると言わざるを得ない。むしろ私には、小型の辞書の語義説明の方がしっくりくる。

このようならばらつきを考えると、思い当たるのは、「表象」という語が元々は学術用語として使用される翻訳語だ、ということである。これは外国語の文献に日常的に接している我々にはよくあることであるが、日本語で定着した翻訳語があっても、その語が特に専門的術語である場合には、その語の基本的な意味は、あくまでもその

語の原語がもっている意味で理解してしまふ。そして、日本語での意味と原語での意味の守備範囲が違う場合には、むしろ原語の意味の範囲を優先して理解するのである。「表象」という語は、未だにそのようにして使用されている語ではないだろうか。そう考えれば、各種の国語辞典における語義説明のばらつきも、十分に理解できるであろう。となると、「表象」という語を理解する場合には、どのような分野で使用されているのかを、注意しなければならぬことになる。そして、その分野での基本的な意味と用法を（もしそのようなものがあるとしての話ではあるが）押さえた上で、限定的に使用する必要が生じてくるであろう。ただ単に日本語として同じ「表象」という単語を使用しているから、同じことを論じられるという幻想は捨てなければならぬ。同じく「ふすま」と言っても、夜具の「衾」とからかみの「襖」とむぎかすの「麩」とでは、全く意味が異なる。「表象」の場合には、恐らく元の語が同じであろうから、この比喩は適切ではなく、このような相違はないであろうが、それでも我々は、常にこの語がもつ意味のずれを意識し、自分がどの意味範囲でこの語を用いているのかを自覚しておかないと、実りある議論ができないことになるであろう。

しかしそれでも、やはり同じ単語である以上、共通の最も基本的な語義が存在するのではないかと期待を抱きたくなるのが、人情である。そこで、『広辞苑』で「表象」の原語とされているドイツ語の *Vorstellung* を *DUDEN* の大辞典で調べてみると、「2. a 或る人が或るものについての思考の中で作り出す像。その人は、或る事象を一定の仕方では表象することによって、その像を獲得する。」<sup>(1)</sup> という語義がある。これは既に示した『日本国語大辞典』の「③意識の内に現われてくるものやその内容。」にほぼ対応していると言えるであろう。ヨーロッパ近代哲学を専攻している私からすれば、この語義が一番ぴったりにくるが、現代日本語で使用されている「表象」の語義としては、やや物

足りないかもしれない。そこで哲学の分野で、「表象」の英語訳として真つ先に思い浮かぶ *representation* を「オックスフォード英語辞典」で調べてみると、まず「6. a 心或いは想像力に提示する行為。そのようにして提示された心象。明瞭に抱かれた観念或いは概念。b 明瞭な心象或いは概念を形成する心の働き。そのような働きの能力」という、上述の内容とほぼ同じ語義の他に、「2. c 何らかのイメージまたは形で示すという行為或いは事実」という語義がある。これが『日本国語大辞典』の「②考えなどを形に現わすこと。特に、ある抽象的なものごとを、別のより具体的なものごとによつてあらわすこと。」にほぼ対応すると考えることができよう。恐らく、「表象文化論」で取り扱われる「表象」とは、こちらの意味が強いのではないかと思われる。そこで、私としては、「意識の内に現われてくるものやその内容。」と「考えなどを形に現わすこと。特に、ある抽象的なものごとを、別のより具体的なものごとによつてあらわすこと。」という、この二つの語義を「表象」の基本的な意味として理解したいと思う。<sup>(6)</sup>

## 二 哲学に於ける「表象」概念について

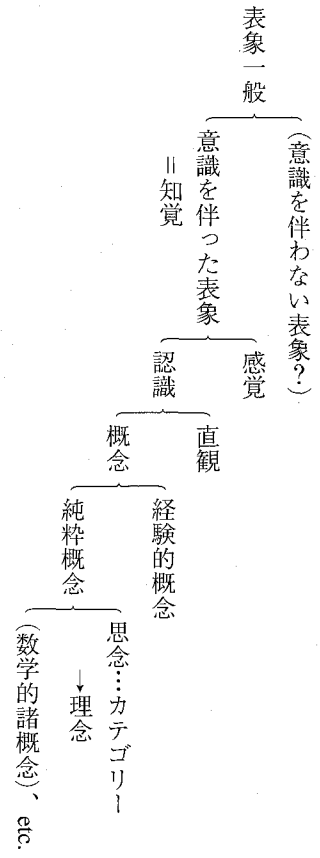
次に、主にヨーロッパの近代哲学を手引きに哲学研究を行っている私が、「表象」概念をどのように理解しているかを述べ、哲学の立場からこの概念を解明してみたい。

「表象」という語は、哲学という学問分野の内部でも、一筋縄ではいかない、やっかいな概念の一つである。まず、原語を確定することが難しい。『広辞苑』が「表象」の原語として *Vorstellung* を挙げていたが、確かに哲学の分野では哲学用語としての *Vorstellung* は「表象」と訳するのが一般的である。そこで、第四版で一九三〇年出版といふかなり古い哲学辞典ではあるが、出典を精密に網羅しているので信頼性が高く定評のある、アイスラー (*Rudolf Eisler*)

の『哲学概念辞典』<sup>(7)</sup>で *Vorstellung* を調べてみると、哲学用語としての *Vorstellung* に当たる言葉として、ギリシア語の *phantasia* から始まって、ラテン語の *perceptio*, *idea*, *representatio*、英語の *idea*, *perception*、フランス語の *idée*, *perception* が、見出し語として掲げられている。*phantasia* は表象と訳される（もともと「想像」「想像力」と訳される場合もある）ことが多いからいいとしても、他の語は、*representatio* を除けばすべて、一般には「表象」とは訳さない語である。*idea*, *idée* は「観念」と訳すし、*perceptio*, *perception* は「知覚」と訳すのが一般的である。しかも、ドイツ語で初めて *Vorstellung* を学術用語として使い始めたとされているヴォルフ（Christian Wolff, 1679-1754）の著作を調べてみると、彼が書いたドイツ語の形而上学の教科書に添えられたドイツ語とラテン語の対照索引に *Vorstellung*, *Idea*、<sup>(8)</sup> という記述がある。以上を踏まえれば、ドイツ語の *Vorstellung* に当たる語は、哲学に於いては英語やフランス語で *idea* とか *perception* というのかと思われるであろうが、例えば私がよく使用するカントの『純粹理性批判』の英訳本では、律儀に *Vorstellung* は *representation* と訳してある。結局のところ、哲学用語としての「表象」を意味するドイツ語は *Vorstellung*、英語やフランス語は *idea*, *idée* や *perception* 及び *representation*, *représentation* であるとするのが賢明であろう。<sup>(9)</sup>

では、哲学用語として或る場合には「知覚」とか「観念」とかとも表現されうる「表象」とは、どのようなものであろうか。

これに関しては、カントが『純粹理性批判』<sup>(10)</sup> に於いて「表象様式の諸段階」（*Stufenleiter der Vorstellungsart*）（*KdV*., A320, B376f.）として述べている、表象の分類を見てみよう。



このような分類を踏まえれば、カントが「表象」と考えているのは、あらゆる我々の認識活動（何かを知るという意識活動）に於いて見出される意識内容ということができらるであろう。従って、哲学に於いて「表象」という場合は、既に述べた「表象」の基本的な語義「意識の内に現われてくるものやその内容」を意味すると言うことができるのである。

### 三 表象の構造についての哲学的分析

さて、次に「表象」そのものもつ構造について、哲学はどのように考えているのであろうか。それは、アイヌラ  
 ーの解説がその概略を教えてください。

表象 (Vorstellung) とは、表象する (Vorstellen) という事象 (Vorgang)、或る意識に於ける表象内容の出現、より基本的な意識の諸事象を結合する心的過程によつてそのような表象内容が成立すること、を意味すると同時に、抽象に於いては表象事象から区別されるが、レアルには分離されない、体験の複合体としての表象内容、そのものをも意味する。最後に、「表象されたもの」は、表象対象として、即ち客観として区別される。客観は、表象によつて代表 (vertreten, repräsentieren) される。客観をこれ「表象」が指示する。確固とした普遍妥当的な統一としての客観に、その都度の、変化する、主観的に異なりをもつ表象が、関係しているのである。<sup>1)</sup>

ここでは、表象が三つの側面から考察されている。まず第一に、意識内容を出現させる意識の活動そのものとしての「表象作用」。第二に、その活動に於いて成立する意識の内容である「表象内容」。この二つは、ともに「表象」という語によつて包括される。言い換えれば、「表象」という語は、「表象作用」を意味すると同時に「表象内容」をも意味している。さらに第三に、「表象内容」は「表象されたもの」の内容であるが、その「表象されたもの」は「表象対象」或いは「客観」と呼ばれる。「表象」は、客観を「代表する」ものであり、客観を「指示する」ものである。

ここで確認しておきたいことは、二つある。一つは、「表象」が意識 (Bewusstsein) の働きでありその内容だということであり、今一つは、「表象」が「客観」を指示し代表するということ点である。

まず第一の、「表象」が意識の働きでありその内容だ、という点に関して。

これは、表象は意識の活動と切り離すことができないものであり、意識内在的な性格をもつということを意味する。

この点に関しては、デカルトから始まるヨーロッパ近代哲学の根本動向と極めて密接な関係をもっていると言ふことができるであろう。ヨーロッパの近代思想の実質的な誕生を宣言すると評価してもよい、デカルトの有名な命題「我思う、故に我在り。」(cogito, ergo sum.) に於いて表明されているのは、たとえ他の一切の存在者が否定されたとしても、なおかつ唯一確実なものとして、意識存在としての人間存在だけは認められなければならない、ということであつた。この卓越した地位をもつ意識存在としての私から出発して、他の一切の存在者の存在を基礎づけることこそ、デカルトが確立した近代哲学の基本戦略である。それは即ち、「表象するもの」(res representans) としての人間存在を、哲学の原理的な位置に据えようとする試みに他ならない。そしてその「表象するもの」がもつ「意識内容」としての「表象」(これをデカルトは「観念」(idea) と呼ぶ) を手がかりとして世界を認識するという仕方、人間と世界との関係が構築される。このような「表象するもの」としての人間存在を原理的な位置に置く捉え方は、(ここでは細かく述べることはできないが、) デカルトに続くジョン・ロックやバークリー、ヒューム、そしてライプニッツやカントといった哲学者たちに受け継がれている。確かにその際、カント以外の哲学者たちは、「表象」という用語ではなく、「観念」(idea) や「知覚」(perception) といった用語を使用しているが、それは問題ではない。この問題は、次に示す表象と客観との分裂・乖離の問題とも直結している。

第二の、「表象」が「客観」を指示し代表するという点に関して。

これは英語の representation の語義にもあるが、「表象」は、それが指し示す対象を「代表する」或いは「代理する」という性格を基本的にもっている。このことは、例えばカントが「純粹理性批判」に於いて「表象の対象」(der Gegenstand der Vorstellungen) (KdV, A104.) とどう表現を手がかりに考察した、「表象」の基本的構造である。「あ



らゆる表象は、表象として、その対象をもっている。そして、それ自身が再び、他の表象の対象でありうる。」(Alle Vorstellungen haben, als Vorstellungen, ihren Gegenstand, und können selbst wiederum Gegenstände anderer Vorstellungen sein.) (KdV, A108.) あらゆる表象は、必ずその対象をもつ。ということとは、表象は、それが表しているもの(対象)とは異なる存在者であるということである。ここに「表象」概念の最も注目すべき性格が表されている。そして、「表象」と「客観(対象)」が別の存在者であるが故に、対象或いは客観が、認識の目標として、まさにアイスラーが言うように「確固とした普遍妥当的な統一」を、即ち「客観性」(Objektivität)をもつと想定されるのに対して、表象は、「その都度の、変化する、主観的に異なりをもつ」ものでしかない、という存在性格の相違が設定されるのである。

この問題についてさらに考察してみたい。

#### 四 「表象するもの」(res representans) と人間の存在—表象と対象との乖離に関する考察

「表象」がその対象と異なる存在者であるということは、「表象するもの」としての人間存在に決定的な影響を与える。それは、どこまで行っても人間は、対象を自らとは異なるものとして表象せざるを得ないということであり、人間は対象との原理的な分裂・乖離に於いて対象を捉えねばならないということである。この乖離は、表象そのものもつ本質的構造に根ざすものであるが、表象と対象との原理的乖離をさらに詳しく見ようとするとき、カントの概念装置が役に立つであろう。

周知のごとく、カントは我々人間の認識が「感性」(Sinnlichkeit)と「悟性」(Verstand)と二つの認識能力によって成り立つと考える。自己及び表象とその対象との乖離を支えるのは、受容性(Rezeptivität)としての感性である。感性は、対象の在り方を直接的(unmittelbar)に捉える「直観」(Anschauung)の能力である。悟性は、この感性の直観を介して「間接的」(mittelbar)に対象と関係することができるだけである。しかし、感性が対象の在り方を直接捉えるとはいっても、あくまでも表象として受け取るにすぎない。「我々が諸対象によって触発される仕方によって諸表象を受け取る性能(受容性)が、感性と呼ばれる。」(KdV, A19, B33)確かに感性的直観は、対象についての直接的表象ではあるが、表象である以上、私の「心の変様」(Modifikationen des Gemüts) (KdV, A99)即ち意識内容であるにすぎず、対象そのものとの間には、既に原理的乖離が生じている。

そして、この乖離はカントに於いては二重の形で描き出される。カントは、我々人間の直観を支える形式的原理として「空間」と「時間」という直観形式を指摘する。空間は「外的直観の形式」であり、時間は「内的直観の形式」である。より詳しくいえば、空間は「外感のあらゆる現象の形式、即ちその下でのみ我々に外的直観が可能である感性の主観的制約」(A26, B42)であり、時間は「内感の形式、即ち我々自身と我々の内的状態を直観することの形式」(A33, B49)である。言い換えれば、我々は外的直観の対象を空間的に表象し、内的直観の対象を時間的に表象すると言ふこともできる。ここで外的直観とか外的現象という場合の「外的」(äusser)とは、意識存在としての私(カントの概念では「心」(Gemüt))の「外」という意味であり、「内的」(inner)とは意識存在としての私の「内」ということを意味する。

従って、外的直観に於いて捉えられた対象は、空間的に表象されることによって、(空間的に表象されるものは「延長を有するもの」res extensa 即ち物体であるから)、意識存在としての私及び私の変様としての表象(これも私の一

部である)とは異なつた或るもの即ち他者として捉えられることになる。これがまず第一の乖離である。

これに対して、内的直観に於いて捉えられる対象は、カント自身が言うように「我々自身と我々の内的状態」である。時間は、内的に直観される経験的自己の形式そのものである。では、内的に直観される対象(自己)と内的直観(表象)との間に乖離は存在しないのであろうか。自己(Selbst)は、内的に直観されている以上、他者ではなく自己である。しかし、そのような自己は、直観されている即ち表象されているが故に、差し当たっては「我々自身に現象している」(KdV., B152.)自己でしかない。そしてその現象する自己は、表象身分しかもたないが故に、「あらゆる表象は、表象として、その対象をもっている」(KdV., A108.)という表象の基本性格に従つて、さらに自らとは区別された「表象の対象」としての自己を指し示すことになる。ここに、現象する自己と現象せざる自己との乖離が生ずる。<sup>(13)</sup>これが第二の乖離である。

ところで、このような現象する自己と現象せざる自己とは、時間という直観形式に於いて捉えられるか捉えられないかによつて区別される。時間に於いて捉えられる自己はつねに多様である。そのような自己は、意識内容として現象するほかないのであるから、ヒュームが言うように「思いもつかぬ速さで次々と継起し、絶えず変化し、動き続ける様々な知覚の束或いは集合」<sup>(14)</sup>であり、常住不変のものではない。これに対して、本来自己が自己といわれる所以は「自己同一性」(Selbstidentität)にある。現象せざる自己は、自己同一性の意識即ち自己意識(Selbstbewusstsein)そのものである。しかしカントが言うように、本来自己意識は、「私は私である」というような分析的命題で表される)「統覚の分析的統一」(die analytische Einheit der Apperzeption)に基づいてではなく、「私は私の表象を思惟する」という、諸表象の総合的統一の作用を含む総合的命題で表されるような)「統覚の総合的統一」(die synthetische Einheit der Apperzeption) (KdV., B133.)に基づいて成立する。即ち、自己は、時間の中に多様に分散した自己自身を自己

同一性の意識の下に総合的に統一する働きに於いて、本来の自己即ち自己意識として成立する。そして、このような根源的自己意識の働きに支えられて初めて、時間の中で多様に現象する自己が自己として認識されるのである。つまり、現象する自己は、時間という直観形式の下では内的直観に於ける多様な分裂した現象でしかない。しかし、内的直観に於いて捉えられている以上、現象する自己は他者ではなく意識存在としての私に属するものであることは確保されている。しかしまた同時に、現象する自己は、その自己の多様な在り方を一つの同一の自己として統一する統覚の根源的総合的統一の働きなしには、自己同一性を確保することができないが故に、現象する自己となることすらできないのである。従って、時間という直観形式は、一方では自己を分散させ多様な現象とする原理であると同時に、他方では自己を本来の自己同一性の意識として成立させる制約の一つでもある。

さて、この第二の乖離に於いては、現象する自己は表象として私自身によって認識される。しかし、現象せざる自己は、表象の対象として思惟されるだけで、決して認識されることはない。つまり、内的直観に於いては、私は自己自身を表象するのであるが、そこで表象された私とは、私の変様としての私の現象であり、決して私それ自身ではない。従って、外的直観に於いては、対象は表象と区別されることによつて同時に表象する私とも区別されたが、内的直観に於いては、対象は表象とは区別されるが、表象する私とは必ずしも区別されないことになる。むしろ正確には、内的直観の場合には対象が二重化しており、現象する自己は表象と同一化し、現象せざる自己は表象と乖離するのである。

このようにして、「表象するもの」(res repraesentans)としての我々人間は、対象を直観に於いて直接的に捉えるとき、対象を表象として自らの内に取り込みつつ、同時に表象と対象との原理的な分裂・乖離に直面する。それは対象

が他者であろうと自己自身であろうと違いはない。

このことは、否定的に捉えるならば、我々はどのようにして対象の眞の姿を捉えることができるのか、という哲学的眞理論の難問を引き起こすだけでなく、人間存在がそこに住み着いているはずの世界との乖離を、さらには自己自身との乖離をも引き起こす原理になるであろう。

しかし、それと表裏一体のことではあるが、これを肯定的に見れば、人間は「表象」を介して世界や自己と関わることになる。そして我々人間は、「表象」を操作し、これを自由に變化させる能力（想像力と知性）を有している。このことによつて、我々人間は、与えられた表象によつて全面的にその存在を規定されるということを免れている。表象の対象としての回りの世界（環境）や、同じく表象の対象としての過去によつて規定された現在の自己は、「表象するもの」としての人間存在を、その表象内容という点で規定するものである。もし表象がその対象と何の乖離ももたず一致してしまうのであれば、「表象するもの」としての人間は、その存在を対象によつて全面的に規定され、決定されてしまふであろう。しかし我々人間は、表象とその対象との原理的乖離のおかげで、確かに数々の誤謬も犯すであろうが、自らの意志によつてあるべき世界やあるべき自己を「表象」し、それを実現することもできるのである。

このような積極的意義を「表象」概念に見出す時、この意義は単に哲学の分野だけに止まるものではないと考えられる。我々人間の知的活動全体が、このような「表象するもの」としての人間存在の現れであり、あらゆる学問分野に於いてそれを確認することができるはずである。そして、このような観点に立つ時に初めて、前半部で提起した、「表象」のもう一つの基本的語義「考えなどを形に現わすこと。特に、ある抽象的なものごとを、別のより具体的なものごとによつてあらわすこと」を、哲学に於ける基本的語義「意識の内に現われてくるものやその内容」と統一することができるように思われるのである。

## 注

本稿は、二〇〇五年三月に刊行された『表象・文化・社会 平成一六年度愛媛大学法文学部学部長裁量経費研究成果報告書』（愛媛大学新ソフィア学研究会）に掲載した研究報告「人間存在と表象」に大幅に加筆修正を施したものである。なお、同研究報告は、二〇〇四年一月二日に法文学部に於いて開催された、愛媛大学新ソフィア学研究会二〇〇四年度第一回公開研究会に於ける研究報告に基づいている。

(1) 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂版巻十、大修館書店、一七八頁。

① 表はれたしるし。又、表はれたすがた。(史記、龜策傳) 卜筮至預見表象、先圖其利。(後漢書、天文志) 星辰之變、表象之應。

② 現實に感覺を通じて知覺されたもの。觀念作用又は過去の知覺の再生でないもの。英語の Presentation の譯。

(2) 『日本国語大辞典』第二版第一一巻、小学館、二〇〇一年、五三五頁。

① 現われた形、姿。\*小春(1900)〈国木田独歩〉三「自然其物の表象變化を觀て」(以下略)

② (一)する) 考えなどを形に現わすこと。特に、ある抽象的なものごとを、別のより具体的なものごとによってあらわすこと。\*教

育・心理・論理術語詳解(1885)「表識トハ心意内ニ起リタル情狀殊ニ感応等ヲ外面ニ表ハスノ義ニシテ略々表象ト云フモ異名同義ナリ」(以下略)

③ 哲学で、意識の内に現われてくるものやその内容。\*改訂増補哲学字彙(1884)「Manifestation 表象」

〔ちなみに、この『改訂増補哲学字彙』(一八八四年)の初版に当たる一八八一(明治一四)年四月発行の東京大学三学部印行『哲学字彙』全一冊(A Dictionary of Philosophy)によれば、「Manifestation 表象」「Vorstellung 觀念」「Idee 觀念」となっている(『現代のエスプリ』No.79 哲学は何のために』至文堂、一九七四年、二一九頁、二四四頁、二二五頁参照)〕

④ 心理学で、直観的に浮かぶ感覺的な心象。\*新しき用語の泉(1921)〈小林花眠〉「表象(ヒョーシヨウ)」心理学上の言葉としては、外界の事物又は其の過程について、意識中に生じたる心象のこと」

⑤ 象徴。\*新しき用語の泉(1921)〈小林花眠〉「表象(ヒョーシヨウ)」略々文学上の語としては象徴と同じ意味に用ひられてゐる」

(3) とりあえず、手許にあった以下の国語辞典の語義を挙げておく。

◎ 『広辞苑』第五版、岩波書店、一九九八年、二二七七頁。

① 象徴に同じ。

② (哲・心) (Vorstellung, ドイツ) 知覚に基づいて意識に現れる外的対象の像。対象が現前している場合(知覚表象)、記憶によって再生される場合(記憶表象)、想像による場合(想像表象)がある。感覚的・具体的な点で概念や理念と区別される。

◎ 『大辞林』第三版、三省堂、二〇〇六年、二一六一頁。

感覚の複合体として心に思い浮かべられる外的対象の像。知覚内容・記憶像など心に生起するもの。直観的な点で概念や理念の非直観的作用と異なる。心像。観念。

◎ 『新潮国語辞典』第二版、新潮社、一九九五年、一七九五頁。

① あらわれたかたち。

② 心に思い浮かぶ物のかたち。

③ (心) 心に思い浮かべられた外界を対象とした像で、感覚的・具体的なもの。過去の経験をそのまま再生した記憶表象、経験を新しく構成する想像表象などがある。

◎ 『新明解国語辞典』第四版、三省堂、一九九七年、一一〇二頁。

① 観念として頭に思い浮かべること(たもの)。「記憶―」「想像―」② シンボル。

◎ 『現代国語例解辞典』第二版、小学館、一九九七年、一〇七七頁。

① 意識に現れてくるもの内容。知覚表象、記憶表象、想像表象など。

② ある抽象的な物事を、別のより具体的な物事によって表すこと。また、その表されたすがた。

(4) *DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*. 10 Bände auf CD-ROM. PC-Bibliothek Version 2.01 mit Plus-Paket ©2000 Dudenverlag, Mannheim.

(5) *Oxford English Dictionary* (2nd Edition) on CD-ROM, Ver. 3.0, Oxford Univ. Press, Oxford, 2002.

(6) 二〇〇四年度の新ソフィア学公開研究会での討論結果を踏まえても、基本的にはこのような理解が受け入れられたと考えている。ただ、第一回の研究会の際に、以下の資料に示された語釈が、「表象」の語釈として最も理解しやすいという指摘があったことは、記録しておくべきであろう。

**representation** (「リーダース英和辞典」第二版、研究社、一九九九年)

1 a 表示、表現、描写、描出。〔言〕(符号などによる)表示。肖像(画)、絵画、彫像。b 想像(力)、概念作用。表象。〔美〕具象主義 (representationalism)。c 上演。演技。

2 代表、代理、代表行為。代表が出ていること〔を出す権利〕。代表制、代議制。代表団、議員団。

3 〔事実などの〕提示、説明。申し立て、抗議(声明)、陳情。〔法〕表示(契約に関する事項「事実」)についてなされる陳述。

(7) Rudolf Eisler, *Wörterbuch der philosophischen Begriffe*, 4. Aufl., Berlin 1930, Bd. 3, S. 437.

(8) Christian Wolff, *Vernünftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*. in: *Christian Wolff Gesamelte Werke* 1. Abl. Bd. 2, *Vernünftige Gedanken* (2) (*Deutsche Metaphysik*). Nachdruck der Ausgabe Halle 1751, Hildesheim 1983, S. 677.

(9) 実際、日本に於ける最も新しい哲学事典である『岩波 哲学・思想辞典』(岩波書店、一九九八年)は、この立場を採用している。

(10) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Riga 1781<sup>1</sup>, 1787<sup>2</sup>. 慣例に従って、第一版の頁数を A.:、第二版の頁数を B.:と表記する。

(11) Eisler, a. a. O.

(12) 前掲の注(6)『リーダース英和辞典』第二版参照。

(13) この思惟主観としての自己と現象的自己との関係は、思惟主観としての自己の思惟の働き(総合的統一の働き)による自己触発によって内感の多様が生じ、経験的自己の現象が成立するとカントは考えている。これについては、拙稿「カントに於ける内的触発について―『純粹理性批判』§24の一考察―」(『哲學』第三九集、広島哲学会、一九八七年、三〇一―四四頁)を参照。

(14) David Hume, *A Treatise of Human Nature : Being An Attempt to introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects*. 1739, 1740, Book 1, Part 4, Section 6; in *The Clarendon Edition of the Works of David Hume*, *A Treatise of Human Nature*, *A Critical*



*Edition*, Vol. 1., ed. by D. F. Norton & M. J. Norton, Oxford, 2007, p. 146.